

教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 青柳 隆志

学位: 教育学修士

文学修士

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
日本文学 芸術学・芸術史・芸術一般	古代文学・中世文学・漢文学 音楽学・雅楽	
主要担当授業科目	日本の歴史と文化・伝統文化(装束)・伝統文化(きもの)・日本語表現法・博物館実習	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 「和歌披講」カリキュラムの開発	平成18年4月1日～ 平成22年6月1日	早稲田大学文学部において、「和歌披講」を大学のカリキュラムとして全国で初めて実践した。これにより、「披講」が芸術科目の一として成立することが実証され、新たな分野の開拓につながった。平成21年には青山学院大学文学部での集中講義を行った。また、平成22年には、披講に関する小冊子「和して歌う」を刊行した。
2) 「和歌披講」の教員養成指導	平成18年11月14日	千葉県高等学校教育研究会国語部会の招請により、千葉県下の高校国語教員に対して、「和歌披講」の実践指導を行い(千葉県立市川北高等学校)、『国語教育—研究と実践—』第44号誌上で紹介された。
2 作成した教科書・教材 1) 三省堂 全訳基本古語辞典 朗読CD監修および朗読	平成19年1月10日	古典教育における朗読実践の必要性に鑑み、古語辞典にCDを付す総合プロデュースを担当し、自ら、『万葉集』『古今集』『新古今集』の朗読例を実際に示した。
2) えんぴつでなぞる・CDで歌える百人一首	平成19年11月8日	「和歌披講」の実践テキストとして百人一首のすべての歌を実際に披講したCDと、すべての歌の楽譜を付した画期的な教科書であり、和歌文学と「披講」の教育に資するところ大である。
3 教育上の能力に関する大学等の評価 1) 学生による授業評価	平成19年12月	平成18年度～19年度前期の学生授業評価において、特に「授業目的が明確」「話し方が明瞭」項目で高い評価を得た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項	平成19年4月1日	声優としての長年の経験を活かし、東京成徳大学人文学部において、「口頭表現法」の授業を新たに担当し、声による表現の

		大学教育における可能性を広げた。
5 その他		
1) 第17回日本歌謡学会志田延義賞	平成12年5月27日	『日本朗詠史 研究篇』の成果に対して。
2) 第19回田邊尚雄賞 (東洋音楽学会)	平成14年10月10日	『日本朗詠史 年表篇』の成果に対して。
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許	昭和59年3月	中学校教諭第一種免許 国語(千葉県教育委員会・昭五八中一普第二八四号)
	昭和61年3月	高等学校教諭第一種免許 国語(千葉県教育委員会・昭六〇高一普第六六号)
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての 特記事項		
4. その他		

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 日本朗詠史 研究篇	単著	平成11年2月	笠間書院	日本における朗詠の実態について通時的に考察した初の研究書であり、日本音楽史のなかで新たな一分野を確立した記念すべき論集。平安時代から南北朝期に至る各時代の朗詠の実情を詳細に検討したことが評価され、平成12年5月27日、第17回日本歌謡学会志田延義賞を受賞した。付録として、現存する朗詠十五曲すべてを収めたCD2枚を付す。1～596頁。
2. 日本朗詠史 年表篇	単著	平成13年2月	笠間書院	上記著作の基礎資料として、平安時代から南北朝期までの朗詠および和歌披講の実例を、網羅的に年表化したもの。人名索引・歌詞索引を具備し、朗詠の歴史が体系的にわかるような形で整理され

3. えんぴつでなぞる・CDで歌える 百人一首	単著	平成19年11月	ナツメ社	<p>た画期的な年表。一組の書籍に対して異例のことながら、平成14年10月12日、東洋音楽学会より田邊尚雄賞を授けられた。1～333頁。</p> <p>百人一首の全ての歌について、注釈、書道手本（岡田崇花）ならびに披講の楽譜と実際の披講のCDを付した初めての实用書。披講楽譜ならびに披講CDは全て自主プロデュースにより行った。宮中歌会始における披講の実例を、「披講会」以外で初めて実演した記念すべきCDブックである。1～215頁。</p>
4. 白居易研究講座第三巻 日本における受容 (韻文篇)	共著	平成5年10月	勉誠社	<p>共著：太田次男・津田潔・三木雅博・後藤昭雄・谷口孝介・大曾根章介・本間洋一・佐藤道生・川村晃生・渡辺秀夫・近藤みゆき・柳澤良一・青柳隆志・石川一・佐藤恒雄・稲田利徳・乾安代。</p> <p>平安中期、日本文化に圧倒的な影響を与えた白楽天とその作品についての研究講座であり、本巻は全七巻のうちの第三巻である。執筆は「朗詠・今様と白氏文集」249～265頁。</p>
5. 日本古典文学の諸相	共著	平成9年1月	勉誠社	<p>共著：身崎壽・青柳隆志ほか36名。</p> <p>桑原博史筑波大学教授の記念論集であり、門下による多様なテーマの論文が集成されている。執筆は、女性の朗詠を扱った「女流朗詠考」288～305頁。</p>
6. 中世説話の〈意味〉	共著	平成10年2月	笠間書院	<p>共著：馬淵和夫・稲垣泰一・稲葉二柄・田口和夫・渡辺信和・相田満・深野浩史・青柳隆志・宮崎和廣</p> <p>説話文学に関する学際的研究をめざした意欲的な論集であり、前半はシンポジウムとして「中世説話の意味」について軍記・芸能・仏教・注釈などの側面からのアプローチが試みられている。執筆は「御製朗詠考」177～186頁。</p>
7. 説話論集 第九集 (歌物語と和歌説話)	共著	平成11年8月	清文堂書店	<p>共著：山本登朗・仁平道明・妹尾好信・後藤康文・深沢徹・青柳隆志・新藤協三・小川豊生・伊井春樹・錦仁。</p> <p>説話文学に関する多方面からの知見を集成しようとする試みであり、現在第十六集まで刊行されている。第九集では歌物語と和歌説話との関わりを考察する。</p>

8. 源氏物語研究集成 第九卷 (源氏物語の和歌 と漢詩文)	共著	平成 12 年 9 月	風間書房	<p>執筆は、説話の中に描かれた和歌披講について論じた「和歌を吟ずる人々」171～201 頁。</p> <p>共著：田中初恵・清水婦久子・山田利博・伊井春樹・田中隆昭・<u>青柳隆志</u>・新聞一美。</p> <p>源氏物語研究の水準を示す論集として高い評価を得ている『源氏物語研究集成』全十五巻のうちの一冊で、本巻は源氏物語と和歌・漢詩・歌謡などの関係を扱った論文を集める。執筆は「源氏物語における朗詠と催馬楽」217～251 頁</p>
9. 源氏物語の鑑賞と基礎 知識②紅葉賀・花宴	共著	平成 14 年 4 月	至文堂	<p>共著：伊藤博・柏木由夫・吉田光浩・倉田実・植木朝子・<u>青柳隆志</u>・倉木一宏。</p> <p>『源氏物語』の各帖について、「鑑賞」と「基礎知識」をふんだんに取り入れた充実のシリーズ。本巻は 22 巻で「紅葉賀」「花宴」の二帖を対象とする。執筆は「紅葉賀」に出る舞楽・青海波の詠をめぐって、「朗詠」との関連を論じた「詠と朗詠」246～258 頁。</p>
10. 和歌を歴史から読む	共著	平成 14 年 10 月	笠間書院	<p>共著：五味文彦・廣岡義隆・後藤昭雄・滝川幸司・工藤重矩・川村裕子・<u>青柳隆志</u>・田淵句美子・兼築信行・小川剛生・村尾誠一・小高道子・盛田帝子・岩佐美代子・井上宗雄。</p> <p>和歌文学会が「和歌」の周辺を探ることを目的に取り組んでいる意欲的な「和歌文学論集」シリーズの一冊である。執筆は、披講諸役のなかで、比較的の発生の経緯が明確でない「発声」について考察した「披講諸役の成立—「発声」の登場—」127～146 頁。</p>
11. 平安朝文学 表現の位 相	共著	平成 14 年 11 月	新典社	<p>共著：平田喜信・<u>青柳隆志</u>ほか 26 名。</p> <p>平田喜信横浜国立大学教授の記念論集であり、多方面にわたる学究が平安朝文学という視点から多くの論文を寄せている。執筆は、『枕草子』の朗詠の名手として名高い藤原斉信を扱った「藤原斉信と朗詠」407～425 頁。</p>
12. CDブック 和歌を歌 う—歌会始と和歌披講— (日本文化財団編)	共著	平成 17 年 8 月	笠間書院	<p>共著：中島宝城・坊城俊周・<u>青柳隆志</u>・酒井信彦・兼築信行・遠藤徹・坂本清恵 宮中歌会始の披講に関する初の総合的</p>

13. 文学史の古今和歌集	共著	平成 19 年 7 月	和泉書院	<p>手引書、研究書であり、国立劇場で平成 10 年から平成 18 年にかけて 6 回行われた「和歌の披講」のパンフレットに掲載された解説文のなかから、重要と思われるものを青柳隆志が選び再構成したもの。披講会による歌会始等披講の CD を付す。執筆：45～46 頁、125～145 頁。</p> <p>共著：鈴木宏子・山崎健司・青柳隆志・高野晴代・森正人・浅田徹・鈴木元・久保田啓一・徳岡涼・竹嶋麻衣。</p> <p>『古今和歌集』1100 年熊本フォーラムを契機として編まれた論集であり、『古今和歌集』についての意欲的な論考が収められている。執筆は『新撰万葉集』の意義を扱った「『古今集』前夜—『新撰万葉集』の蹉跎と試み—」59～80 頁。</p>
14. 古筆と和歌	共著	平成 20 年 1 月	笠間書院	<p>共著：久保木哲夫・伊井春樹・田中登・田中大士・武井和人・藤田洋治・杉本まゆ子・中村文・日比野浩信・徳植俊之・久保木秀夫・石澤一志・大久保廣行・平舘英子・浅田徹・高野晴代・滝澤貞夫・加藤幸一・青木太朗・近藤みゆき・渦巻恵・新藤協三・伊藤博・後藤祥子・平野由紀子・武田早苗・加藤静子・竹下豊・柏木由夫・植木朝子・佐藤恒雄・谷知子・佐藤明浩・寺島恒世・田淵句美子・名子喜久雄・石埜敬子・青柳隆志。</p> <p>日本書誌学・文献学の泰斗、久保木哲夫氏の喜寿記念論文集として編まれた、古筆と和歌に関する最先端の研究成果の集成である。執筆は、明治初年の和歌披講の劇的な変化について推定した「披講甲調冒頭部の変化について—明治期歌会始の唱法—」640～651 頁</p>
15. 王朝文学と音楽	共著	平成 21 年 12 月	竹林舎	<p>共著：福島和夫・萩美津夫・豊永聡美・澤田篤子・磯水絵・林嵐・青柳隆志・飯島一彦・小野恭靖・小島裕子・荒木浩・原豊二・浅尾広良・石田百合子・梓田恭代・廣田收・小森潔・久保田敏子・松島仁・上原作和・秋澤互・中川正美・森野正弘・堀淳一。</p> <p>「平安文学と隣接諸学」シリーズの第 8 巻として、音楽と『源氏物語』をはじめとする古典文学との相互の部分についての様々な角度からの考証が集成され</p>

16. 村田一男先生古稀記念論集 八千代の歴史・民俗・文化	共著	平成22年7月	村田一夫先生古稀記念論集編集委員会	ている。執筆は、和歌と漢詩の、披講の際の音楽性について推定した「漢詩・和歌の披講における音楽性」178～193頁 共著：矢戸三男・青柳隆志ほか13名。執筆は、東京成徳大学と八千代市立郷土博物館の博学連携の経緯を時系列に従って述べた「大学教育における博物館連携」133～142頁
17. 源氏物語と音楽 文学・歴史・音楽の接点	共著	平成23年2月	青簡舎	共著：日向一雅・青柳隆志ほか6名。執筆は、「雅楽」のなかで新たに作曲された「朗詠」曲を取りあげた「朗詠と雅楽に関する一考察」191～213頁
(学術論文)				
1. 『新撰万葉集』の和歌配列—上巻春部を中心に—	単著	昭和60年12月	平安文学研究第74輯 11～30頁	『新撰万葉集』は寛平5年(893)に成立した和歌と漢詩(和歌の翻訳詩)を含む特殊な撰集である。本稿では、『新撰万葉集』の撰集資料となった『寛平御時后宮歌合』との比較により、『新撰万葉集』の編者が、歌合の配列の方法を意識しながら、さらに新たな配列を試みていることを、上巻春部の配列を通して論証した。
2. 『新撰万葉集』の和歌配列続考	単著	昭和61年6月	平安文学研究第75輯 68～94頁	1. の結論として、上巻夏部・秋部・冬部・恋部の配列について検証し、それぞれの巻について配列の方法や完成度に差異のあること、転じて『新撰万葉集』がその編集意図を充分に実現できなかった未定稿であったことを論じた。
3. 源氏物語の中における朗詠と歌謡	単著	昭和63年9月	日本語と日本文学第9号 17～26頁	『源氏物語』には漢詩の朗詠や和歌の吟詠の記述が数多く見られる。これらは、「催馬楽」「神楽」などの宮廷歌謡の記述に比べると、「誦ず」「口ずさむ」「ひとりごつ」など、内省的な表出を示す語彙によって表現され、派手やかな形容語や名手と称すべき人物が登場しないなどの特徴があることを指摘し、これが紫式部の意図的な作為によるものという見通しを提示した。
4. 古歌が口ずさまれる場合—平安期の和歌口吟法試論—	単著	平成元年3月	東京成徳国文第12号 65～89頁	平安時代の和歌の吟詠の方法については、推定によるしかない。本稿では源氏物語』に見られるような和歌の一部を吟詠するという方法に着目し、「吟詠されやすい句」(一・三・五句)と「吟詠さ

5. 日本朗詠史年表稿 平安朝篇上 (七九四～一〇五五)	単著	平成2年3月	東京成徳短期大学紀要 第23号 21～81頁	れにくい句」(二・四句)に分かれること、そして、それが当時の和歌吟詠の調子を反映している可能性を指摘した。 平安時代の漢詩文の朗詠、和歌の吟詠の記録を網羅的に集成し、もって詩歌誦詠の実態を浮かび上がらせることを目的として、記録類、物語類を問わず、通時的に年表化した意欲的な試みである。本稿では、平安時代の前期を扱った。
6. 平安朝の朗詠者総覧	単著	平成2年7月	研究と資料 第23輯 29～52頁	6. および9. を基本データとして、ここに登場する「朗詠者」を網羅した資料である。菅原道真以降、詩文の朗詠は大いに盛行し、平安時代を通じて宮廷音楽としての地位を確立したが、とりわけ、『枕草子』に登場する藤原伊周や藤原斉信、院政期の朗詠を支えた源経信や藤原宗忠、平安末期の郢曲大成者藤原師長などの実演記録が注目される。
7. 平安朝の朗詠詞章総覧	単著	平成2年12月	研究と資料 第24輯 1～35頁	6. および9. を基本データとして、ここに登場する「朗詠詞章」を網羅的に集成した。その多くは『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』に属するが、実際に朗詠されたことが確認されている詩句は、その全体(1131首)の15%前後であり、『朗詠集』が必ずしも朗詠の歌詞カードのような存在ではなかったことが確認された。
8. 万葉集の伝誦者総覧	単著	平成3年3月	東京成徳国文 第14号 103～126頁	『万葉集』には、歌を詠む歌人のほかに、それを聞き覚えて他者に伝えたり、宴席等で歌って見せたりする「伝誦者」というべき人々が数多く存在した。若宮年魚麿・田辺福麻呂・大原今城ら専門家をはじめ、40名にのぼる伝誦者の実態を整理した。
9. 日本朗詠史年表稿 平安朝篇下 (一〇五六～一一九二)	単著	平成3年3月	東京成徳短期大学紀要 第24号 1～70頁	6. に続いて平安時代後期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に『平家物語』に数多く見られる朗詠の例を諸本に当たって整理した。
10. 『朗詠』という語について—中国詩文から『和漢朗詠集』へ—	単著	平成3年5月	中古文学 第47号 61～70頁	「朗詠」という語は、『文選』に見られる語であるが、本朝では菅原道真によって初めて用いられた。これが詩文吟詠を表わす用語として定着したのは、『小右記』や『御堂関白記』等の日記において

11. 「まうし」小考—終止形の発見—	単著	平成3年12月	解釈 第441集 6頁	であり、それが藤原公任の『和漢朗詠集』という書名に影響を及ぼした可能性を指摘した。 「まうし」は「まほし」の反対語で、従来、終止形の例が見当たらないとされてきたが、『朗詠要抄 因空本』に「見えまうし」という例のあることを指摘した。
12. 平安朝の朗詠常用曲	単著	平成3年12月	日本語と日本文学 第15号 29～40頁	朗詠の基本曲として知られるものに「朗詠根本七首」があるが、これらは実際の演奏例が少ない。7.の結果から、平安朝の朗詠常用曲は「嘉辰令月」「徳是北辰」「東岸西岸」「新豊酒色」「隆周王穆王」の五曲であることを初めて実証した。
13. 朗詠定数曲考—「朗詠根本七首」「朗詠九十首」「朗詠二百十首」	単著	平成3年12月	研究と資料 第26輯 1～50頁	朗詠定数曲として知られる「朗詠根本七首」「朗詠九十首」「朗詠二百十首」の三種について、各種朗詠譜本との照合を行い、それぞれの成立の過程や、属する曲を図表化して集成し、総合的に検証した。
14. 『朗詠集』に見えない朗詠曲—「朗詠譜本」の十曲—	単著	平成4年3月	筑波大学平家部会論集 第3集 21～36頁	各種朗詠譜本の収録曲のほとんどは、『和漢朗詠集』または『新撰朗詠集』に収められている句であるが、計十曲が、朗詠集に見られない。これらがいかなる事情で朗詠曲となったのかを、一曲ずつ検証した。
15. 日本朗詠史年表稿 鎌倉期篇(1)(一一九三～一二一八)	単著	平成4年3月	東京成徳短期大学紀要 第25号 1～27頁	6. に続いて鎌倉時代初期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に『明月記』等に見られる歌会の披講の例を整理した。
16. 宇治拾遺物語と俊成歌判—第十話の解釈断片—	単著	平成4年6月	解釈 第447集 39～42頁	『宇治拾遺物語』第十話には藤原通俊と秦兼方の和歌説話が載るが、「けれ、けり、けるなどいふ事はいとしもなきこと葉なり」という部分が藤原俊成の歌判を利用していることを指摘し、解釈への影響を論じた。
17. 説話の中の朗詠—改変される朗詠曲—	単著	平成5年3月	今昔物語年報 第7号 3～6頁	『和漢朗詠集』の古写本には異同が多く見られ、これを「朗詠」に起因するという見方がなされているが、実際の朗詠の改変例を通して、本文が簡単には揺動し

18. 新撰萬葉集略注 (第一) —上卷春部—	単著	平成5年3月	東京成徳国文 第16号 67～97頁	ないことを指摘した。 『新撰万葉集』の注釈は、従来、断片的には行われていたものの、総合的には試みられてこなかった(平成17年・18年に注釈書刊行)。上巻春部の和歌・翻訳詩についての注釈・現代語訳を施した。
19. 日本朗詠史年表稿 鎌倉期篇(2)(一一一九～一二三九)	単著	平成5年3月	東京成徳短期大学紀要 第26号 25～54頁	15. に続いて鎌倉時代初期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に『朗詠要抄 因空本』を中心とする記述を整理した。
20. 女性と詩歌の吟誦—『源氏物語』の場合—	単著	平成5年3月	国語教育研究 (千葉大学大学院) 第7号 2～21頁	『源氏物語』に登場する女性たちが、詩歌を口にする状況について、詩文と和歌の場合に分けて論じた。特に、禁忌とされる詩文についての女性ならではの嗜みや、例外的に和歌を吟ずる場合の効果について論じた。
21. 『朗詠要抄 因空本』考	単著	平成5年10月	日本語と日本文学 第19号 31～40頁	朗詠古譜のうち最も古い『朗詠要抄 因空本』の性格について考察した。本譜は一般には通用しない、「秘曲」を中心とした雑纂形式の譜本であり、特に後半は藤原師長を中心とする秘伝を含む伝授譜の性格を有することを指摘した。
22. 心喪と朗詠	単著	平成5年11月	中古文学 第52号 21～30頁	「朗詠」が宮廷歌謡に取り入れられる過程において、極めて重要な事柄として、「朗詠」がその当初、喪中の時期に行われる儀式等に、音楽の代わりに用いられたことを指摘し、特に「心喪」の場合に適合する性質を「朗詠」が本来持っていたことを論じた。
23. 朗詠曲「嘉辰令月」の唱法 —その変遷をめぐって—	単著	平成5年12月	梁塵 研究と資料 第11号 7～24頁	朗詠常用曲「嘉辰令月」が平安時代以降どのように歌われていたかを、日記等で表記される「令月」「万歳千秋」などの記述の差から検証し、楽家と儒者流の朗詠の差異についても言及した。
24. 天皇家と朗詠	単著	平成5年12月	研究と資料 第30輯 13～24頁	天皇が歌謡を口にすることは比較的例外に属するが、院政期以降、天皇が「朗詠」を行うケースが見られるようになる。崇徳院・鳥羽院・高倉院・後鳥羽院等の事跡や、朗詠を得意とした後深草院・亀山院の朗詠の意味づけ等を通時的に論じた。

25. 日本朗詠史年表稿 鎌倉期篇(3)(一二四〇～一二七四)	単著	平成6年3月	東京成徳短期大学紀要第27号 1～27頁	19. に続いて鎌倉時代中期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に『八雲御抄』の披講作法を中心とする記述を整理した。
26. 七月七日の朗詠―「二星適逢」をめぐって―	単著	平成6年3月	国語教育研究(千葉大学大学院)第8号 1～9頁	七夕の朗詠曲として名高い「二星」は、平安時代には朗詠の記録がないが、江戸時代、朗詠が衰退した際にも伝承されていた曲である。この曲が朗詠されるようになった経緯について、資料に基づいて論じた。
27. 朗詠における禁忌―「雲」の朗詠をめぐって―『筑波大学平家部会論集』第四集	単著	平成6年7月	筑波大学平家部会論集第4集 1～13頁	『平家物語』『祇園女御』に見える「竹湘浦に斑なり」という朗詠が「是は禁忌とこそ承れ」といわれた原因について、他の「禁忌」とおぼしき例を挙げながら「雲」が問題視されたものであることを論じた。
28. 源氏物語における詩文吟誦と和歌吟詠―その差異をめぐって―	単著	平成6年7月	研究と資料第31輯 1～9頁	『源氏物語』における詩文の吟誦と和歌吟詠の差異について論じた。詩文が「誦ず」と言われるのに対し、和歌は「うち誦ず」が中心となっていること、その差に表出意識の違いが見られることを指摘した。
29. 「論説文」の指導―短期大学における国語表現法の試み―	単著	平成6年11月	解釈第477集 39～42頁	「論説文」の指導について、宇佐見寛氏の実践例を用いつつ、さらに実例を加えながら、最も重要な点は何かを考察した。
30. 『朗詠要集』考	単著	平成6年12月	梁塵 研究と資料 1～25頁	朗詠古譜のうち二番目に古い『朗詠要集』につき、東京国立博物館法隆寺宝物館の原本を確認した上で、編者聖玄について、また、本譜の構成について論じ、仏教儀式に用いることを前提に編まれたものであることを指摘した。
31. 日本朗詠史年表稿 鎌倉期篇(4)(一二七五～一三一八)	単著	平成7年3月	東京成徳短期大学紀要第28号 1～28頁	25. に続いて鎌倉時代後期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に後深草院・亀山院の朗詠を中心とする記述を整理した。
32. 御製朗詠考	単著	平成7年3月	国語教育研究(千葉大学大学院)第9号 2～12頁	「朗詠」は本来古詩を吟詠するものであるが、平安時代末期以降、詩会に際して天皇御製を、臣下が「朗詠」の形で唱うという事例が見られるようになる。その

33. 看護学校における「文学」の指導	単著	平成7年9月	実践国語研究 No. 151 85～89頁	方法や意義について論じた。
34. 『陽明文庫朗詠譜』考	単著	平成7年12月	梁塵 研究と資料 第13号 1～27頁	朗詠古譜のうち、現存最広本の「陽明文庫朗詠譜」について、その注記に見える「真名本」の存在や、配列・編集上のすきの多さを指摘し、本譜の特殊性を論じた。
35. 日本朗詠史年表稿 南北朝篇(1)(一三一九～一三三九)	単著	平成8年3月	東京成徳短期大学紀要 第29号 1～24頁	31. に続いて南北朝初期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に『陽明文庫朗詠譜』を中心とする記述を整理した。
36. 『菅家文草』における詩文吟誦をめぐって	単著	平成8年3月	国語教育研究 (千葉大学大学院) 第10号 2～17頁	日本に「朗詠」の語を導入した菅原道真は、『菅家文草』に、多くの詩の吟誦記録を残している。本稿では、道真の用いた吟誦用語ならびに日常どのように詩の吟誦を行っていたかを分析して論じた。
37. 亀山院在世の朗詠二題	単著	平成8年12月	梁塵 研究と資料 第14号 25～35頁	亀山院は朗詠の名手としても知られ、後伏見院に対して「朗詠伝授」を行っている。この「朗詠伝授」の詳細と意義、ならびに、『妙槐記』文応四年四月十四日の記述についての考察を行った。
38. 日本朗詠史年表稿 南北朝篇(2)(一三四〇～一三六四)	単著	平成9年3月	東京成徳短期大学紀要 第30号 23～44頁	35. に続いて南北朝中期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に『園太暦』を中心とする記述を整理した。
39. 朗詠古譜逸書考	単著	平成9年3月	国語教育研究 (千葉大学大学院) 第11号 3～17頁	金沢文庫にかつて蔵されていた『和歌朗詠譜』(現在所在不明)について、現在残される奥書の記録からその性質並びに伝授過程を検証した。
40. 日本朗詠史年表稿 南北朝篇(3)(一三六五～一三九二)	単著	平成10年3月	東京成徳短期大学紀要 第31号 1～17頁	38. に続いて南北朝後期の朗詠・和歌吟詠の記録を整理して示した。特に『愚管記』を中心とする記述を整理した。
41. 日本朗詠史年表—詩歌披講所役連名—『東京成徳短期大学紀要』	単著	平成11年3月	東京成徳短期大学紀要 第32号 13～34頁	「日本朗詠史年表」の索引として、詩会・歌会の講師・講頌(ならびに御製講師)の一覧を作成し、その官位・年齢等の平均値を算出した。

42. 朗詠の世界	単著	平成 11 年 4 月	『文学』(季刊) 第 10 卷第 2 号 (特集=歌謡の領分) 25～27 頁	朗詠に関する一般的な漠然としたイメージを、『日本朗詠史 研究篇』の検証に基づき補正することを目的として、朗詠の厳肅性、定数曲・朗詠者の存在等について論じた。
43. 定家、和歌を吟ず	単著	平成 11 年 11 月	国語教室 68 50～53 頁	藤原定家は歌人・歌学者として知られるが、『明月記』等によれば、定家は若い頃から披講の講師を務め、御製講師にもなった経験を持ち、和歌の披講には強い関心を持っていたと考えられることを指摘した。
44. 朗詠	単著	平成 11 年 11 月	國文学 解釈と鑑賞 第 44 卷 13 号 (特集=音楽 声と音 のポリフォニー) 33～38 頁	『朗詠 全十五曲』の CD の曲順にあわせて、朗詠の実演が示唆する諸問題を「朗詠史」の観点から論じた。特に、音楽家と儒者との対立については、現在も依然としてその傾向のあることを指摘した。
45. 中世の「朗詠」－『二水記』を中心として－	単著	平成 13 年 6 月	中世文学 第 46 号 53～62 頁	室町期の楽人貴族、鷲尾隆康の日記『二水記』には、朗詠の記事が数多く載るが、特に、月次の楽会の記事を辿ってゆくと、各月について、決まった朗詠の行われることが知られる。こうした曲目の固定化が、「朗詠」曲を衰微から救ったと考えられることを論じた。
46. 『和漢朗詠集』－「和」と「漢」のコーディネーター	単著	平成 13 年 7 月	季刊 悠久 第 86 号 53～64 頁	『和漢朗詠集』については、従来「朗詠」のための書という位置づけと評価がなされてきたが、必ずしも全ての詩句が実演と結びついていただけではないことに鑑み、編者藤原公任が、「和」と「漢」のあわいを絶妙に取り合わせたものであることを論じた。
47. 朗詠曲「徳是北辰」の歌唱形式	単著	平成 13 年 12 月	日本歌謡研究 第 41 号 70～79 頁	「嘉辰令月」に次ぐ朗詠常用曲、「徳是北辰」は現在、一反のみ朗詠されるが、鎌倉期末期以降には、二反繰り返され、しかも、歌い手が次々と代わってリレーして歌い継ぐという例が見られるようになる。本稿ではこの唱法を精査し、他の朗詠曲においてもこの方法が準用されていたことを検証した。
48. 明治初年の歌会始—歌御会始から近代歌会始へ	単著	平成 14 年 12 月	和歌文学研究 第 85 号	明治天皇の即位以後、「歌御会始」は時代の激流と共に大きく様変わりするこ

の推移—			1～11 頁	とになる。明治二年、京都で行われた最後の歌御会始は、江戸時代の歌御会始の流れを継承するものであったが、東京で行われるようになった歌御会始は、年ごとに新たな様相を見せてゆく。その変化のプロセスを追った。
49. 頌声考	単著	平成 15 年 3 月	東京成徳大学紀要 第 10 号 75～86 頁	「頌声」とは、詩会に際して、提出された上位者の詩を「ほめる」声と考えられるが、それがどのようなものであるかは判然としなかった。本稿では、「頌声」の実例を集成し、これが「講師」によって行われる独特のものであること、ならびにそれが「朗詠」と結びついたという『文机談』の記述について論じた。
50. 詩披講考	単著	平成 15 年 3 月	東京成徳国文 第 26 号 127～137 頁	和歌の披講譜の実例は数多く残されているが、詩の披講譜の実例はほとんどない。本稿では、ほぼ唯一と目される、五条為学の『為学卿記』明応四年十一月晦日所載の詩披講譜について詳細な分析を加え、なぜこの譜が残されたのか、という理由について考察した。
51. 後崇光院と朗詠	単著	平成 16 年 7 月	日本文学 第 53 卷 7 号 32～41 頁	後崇光院貞成親王は、その浩瀚な日記『看聞日記』で知られるが、その中には「朗詠」の記述を数多く含む。本稿では、その実演の記録を整理し、貞成親王が、綾小路信俊から稀曲を含む多くの朗詠曲の教習を受けていた実情を明らかにすると共に、その意味づけを行った。
52. 披講作法点描	単著	平成 18 年 3 月	文彩 第 2 号 11～17 頁	大原重明著『歌会の作法』（昭和 2 年）には、歌会における披講の作法として挙げられる事柄が数多く見える。その中から、実際の披講に有用と見られる記述を取り上げ、その背景や意味について言及した。
53. 披講—声に出して読むこと—	単著	平成 18 年 12 月	季刊 悠久 第 106 号 48～56 頁	披講の歴史について、その発生から現在に至るまでのプロセスを、実例と披講譜等の写真を用いて説明し、披講の持つ意義と展望について論じた。
54. 大永二年綾小路資能筆和歌披講譜をめぐって	単著	平成 20 年 6 月	中世文学 第 53 号 49～57 頁	筆者所蔵の日本最古の和歌披講譜「大永二年綾小路資能筆和歌披講譜」について、その成立の由来と、実際の演奏の再現を五線譜で行った。

(その他)				
1. 「朗詠」項目執筆	単著	平成9年11月	日本古典文学研究史大事典 勉誠社 784～785頁	朗詠についての研究史を簡潔に整理して示した。
2. 朗詠と披講について	単著	平成10年4月	伝統文化鑑賞会「和歌の披講」パンフレット 18～19頁	朗詠と披講の違いについて説明した。
3. 歌合の和歌朗唱について	単著	平成10年12月	新日本古典文学大系『六百番歌合』月報 岩波書店 4～6頁	歌合における披講の実例について説明した。
4. 和歌披講譜考	単著	平成11年5月	伝統文化鑑賞会「和歌の披講」パンフレット 18～19頁	和歌披講譜の系統やその性質について解説した。

5. 古詩「朗詠」貴族のたしなみ	単著	平成11年7月	『日本経済新聞』朝刊文化面 7月1日40面	「朗詠」の意味や実演の歴史について概説した。
6. 朗詠—漢詩文と音楽との格調高きハーモニー—	単著	平成11年10月	歌謡文学を学ぶ人のために 世界思想社 56～69頁	朗詠の基本的な知見について概説した。
7. 披講所役の成立	単著	平成12年4月	伝統文化鑑賞会「和歌の披講」パンフレット 14～17頁	和歌披講の諸役がいつごろ成立したかを概説した。
8. 公宴続歌のこと	単著	平成14年4月	伝統文化鑑賞会「和歌の披講」パンフレット 20～23頁	『公宴続歌』のなかで諸役の示されるものについて紹介した。
9. 万葉集の誦詠者について	単著	平成18年4月	伝統文化鑑賞会「和歌の披講」パンフレット 30～34頁	『万葉集』における誦詠者について概説した。
10. 敷島の道 歌合（口絵解説）	単著	平成19年3月	季刊 悠久 107号 5～12頁	「歌合」の画像資料（天徳内裏歌合等）について解説した。
11. 書評 山本啓介著『詠歌としての和歌 和歌会作法・字余り歌一付〈翻刻〉和歌会作法書一』	単著	平成21年6月	日本文学 58巻6号 56～57頁	歌会における作法についての初の専門的考究に対して、和歌披講史の視点からその意義の大きさを賞揚した。
12. 報告 大学と博物館の連携と現状の課題—東京成徳大学の事例から—	単著	平成26年4月	MUSEUM ちば千葉県博物館協会研究紀要第43号 23～26頁	東京成徳大学と八千代市立郷土博物館の博学連携の経過と意義について考察して報告した。
13. 項目執筆「朗詠」「披講」ほか	共著	平成26年12月	和歌文学大辞典 古典ライブラリー	和歌の披講および歌謡についての15項目を分担執筆した。